

Title	《弱法師》演出の変遷
Author(s)	宮本, 圭造
Citation	演劇学論叢. 2000, 3, p. 114-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97575
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

《弱法師》 演出の変遷

宮本圭造

はじめに

『観世流仕舞付』巻四に収められる《弱法師》の型付は、わずか七行と短いながらも、その記事は《弱法師》の演出の変遷を窺う上で実に示唆に富む内容を含んでいる。まずは岡家本によって、その全文を次に掲げることしよう。

十七天星

一、初男出る。上下也。次第・名乗・道行云てから、僧出る。又初男出て、名乗て其俵一せいをも打也。シテ、面則天星と云面也。童子の目をふさきたる様の面也。黒頭、鉢巻、水衣、杖つく。扇さす。一せい、シテ柱ノ前ニて云。又橋懸にて云て、「石の鳥居爰なれや」と云時分方そろく〜と出、大鼓の右へつく心。問答如謡。文句能分別すへし。曲舞、立てもゐても。破ノ舞有。「入日のかけもまふとかや」と云て也。舞、杖

にてまふ。又、一段杖にて後ハ扇にてまふ事も有。

一 稀曲《弱法師》

『観世流仕舞付』所収曲のうち、記事が極端に短いものは、当時上演頻度の少ない稀曲であったと考えられるが、僅か七行の記事しか見られない《弱法師》もまたその例外ではない。『観世流仕舞付』が《弱法師》の曲名に「天星」という見慣れない文字を宛てているのも、そのことと無関係ではなく、《弱法師》という能は、『観世流仕舞付』がまとめられた江戸初期にはほとんど上演された形跡がないのである。その《弱法師》の上演史をたどることは、演出の変遷史とも深く関わってくる問題であるので、ここではまず、《弱法師》の上演状況を一通り明らかにしておきたい。

《弱法師》の上演記録の初出は、永享四年（一四三二）

三月十五日、丹波猿樂矢田座による伏見宮御所での演能である。「看聞日記」に当日の番組が見えるが、『弱法師』だけが「よろほし」と仮名書きで記してあるのはいささか注目される。世阿弥本でも、「ヨロホシ」と仮名書きであり、当時必ずしも曲名表記が定まっていなかった状況を窺わせるのである。実際、江戸初期以前の『弱法師』の曲名表記は実に様々である。例えば、妙庵玄又手沢謡本（松井文庫蔵）は内題が「よろほし」と仮名書きで、目録には「透世子」とあり、室町末期写無章句謡本（鴻山文庫蔵）には「天靈星」、江戸初期の大蔵虎清『間風流伝書』（鴻山文庫蔵、西村本『問之本』（筑波大学図書館蔵）はいずれも仮名で「よろほし」、『観世流仕舞付』は、岡家本「天星」、宮内庁書陵部本「天星」という具合で、「弱法師」の曲名表記が江戸初期にはいまだ定着していなかったことが窺われる。貞享四年（一六八七）刊『能之訓蒙図彙』の能名寄には、外百廿番として「弱法師」が見え、番外謡として「夫靈星」「透世子」が挙がっていることから、江戸中期には「弱法師」の曲名が一般化し、その他の表記が廃れていったものと見られるが、それは室町以来、長く廢曲同然だった『弱法師』が、貞享頃になって復活を見、次第に上演されるようになったことと関わっていると思われる。

永享四年に続く『弱法師』の上演記録は、管見の限りで

は、貞享元年（一六八四）十一月三日、江戸の伊達藩邸で宝生将監が演じている（伊達藩家老『石母田家文書』）のが最も早い。江戸初期まで廢曲同然だった『弱法師』の復活が、將軍綱吉周辺での稀曲上演の影響であることは、天野文雄氏「復活前後の『弱法師』」（『片山九郎右衛門後援会々報』50。平成三年）などに指摘されるところであるが、江戸中期における『弱法師』の最も早い上演記録が、綱吉の愛顧を得た宝生大夫によるものであることは注目されよう。『石母田家文書』によれば、翌貞享二年の十二月十九日、伊達藩お抱えの小野清太夫（喜多流）が本曲を演じた記録もあり、この頃、喜多流でも『弱法師』を演じるようになっていたらしい。以後、『弱法師』の上演記録は頻出するが、江戸期を通じて、『弱法師』を最も頻繁に上演しているのは、この宝生・喜多の両流である。

一方、観世流では十五代元章が『弱法師』を「羸法師」の曲名で明和本に入れていた。それ以前から観世流のレパートリーだったかどうかは定かでないが、ほぼ江戸後期を通じて上演されており、天保書上でも所演曲とする。これに対し、金春流・金剛流はともに天保書上の所演曲に『弱法師』を入れていない。金春流の『弱法師』は明治になってからの復曲であるが、もつとも、弟子家ではこれを演じることがあり、伊達藩の能番組である「能組留」（宮城県図

書館伊達文庫蔵)に、正徳四年(一七一四)十一月、伊達藩お抱えの金春流の大夫桜井八右衛門が演じたことが見えるほか、享保三年(一七一八)三月の大坂での春藤六右衛門勸進能でも、金春流の大夫で南都禰宜役者の中村左兵衛が演じているなど、若干の上演例が確かめられる。金剛流でも、米沢に伝わった『金剛流秘密口伝書』(「東岳院様能楽余香」所収)に《弱法師》の記事があるほか、禁裏で正徳三年と宝暦十一年に金剛流の野村三郎兵衛と野村八郎兵衛がそれぞれ本曲を演じている(天野氏前掲論文)。

このように、《弱法師》は室町から江戸初期には上演の稀な稀曲であったが、江戸中期の貞享頃、綱吉周辺での稀曲ブームに乗って復活、宝生・喜多流でしばしば上演され、以後、その他の流でも演じられるようになる。こうした上演状況を反映して、江戸中期以降、《弱法師》の演出資料は比較的多く見られるが、江戸初期にさかのぼる演出資料はごく僅かしか残されておらず、そうした中であって、『観世流仕舞付』所収の《弱法師》の記事は、同曲のままたった型付としては最も古いものであり、そこに記される内容も《弱法師》が稀曲であった時代の過渡的な演出を伝える資料として大変貴重なものなのである。

二 世阿弥本《ヨロホシ》から現行《弱法師》へ

《弱法師》には、世阿弥本の忠実な写しが現存する。主だった構成は現行《弱法師》と大差ないが、冒頭に四天王寺の住僧が登場すること、シテ俊徳丸が妻を伴って登場することなど、登場人物に少なからぬ異同がある。この世阿弥本の形から、現行の《弱法師》にいたるまでには、種々の変遷を経ており、そうした変遷の過渡的な段階を示す謡本の存在も知られている。江嶋伊兵衛氏が「弱法師の異本」(「宝生」昭和38年3月)で紹介された鴻山文庫蔵の室町末期写無章句本《天靈星》、西野春雄氏「弱法師の新出異本」(「宝生」平成4年3月)で紹介された南部家旧蔵の上掛節付謡本《弱法師》(八戸市立図書館蔵。これと同じく、ワキの次第で始まる形は、京大蔵の江戸初期下掛節付十三冊本《弱法師》にも見られる)がそれである。前者はワキ高安通俊の次第・名乗り・道行に始まり、続いて四天王寺の住僧が登場するという形で、世阿弥本《ヨロホシ》の面影をなおとどめた本文を伝え、後者は、四天王寺の住僧は登場しないものの、ワキ高安通俊の次第・名乗りで始まり(現行では次第はない)、現行にさらに近づいた本文を有している。これを要するに、《弱法師》は、世阿弥本《ヨロホシ》から無

章句本《天靈星》へ、そしてさらに南部家旧蔵本《弱法師》の形を経て、現行《弱法師》にいたったと見ることが出来よう。

『観世流仕舞付』のまとめられた江戸初期、《弱法師》は世阿弥本《ヨロホシ》から現行形への過渡的な状況にあることがここから窺われるが、それを如実に反映して、『観世流仕舞付』も《弱法師》について、古態をとどめる演出と、現行に近い演出の二通りの形を書き留めている。すなわち、「初男出る。上下也。次第・名乗・道行云云から、脇出る」とあるのは、先に見た室町末期写無章句本の形と一致し、「初男出て名乗て其俣一せいをも打也」とあるのは、現行のそれと合致するのである。室町末期写無章句本の古風な演出が『観世流仕舞付』に伝えられているのは興味深いが、この記事によれば、『弱法師』の住僧を出す演出は江戸初期頃まで細々ながらも伝承されており、同時に現行形の演出もすでに行なわれていたことになる。現行に近い高安通俊の名乗りで始まる形は、慶長四年写の妙庵玄又手沢謡本がすでにこの形であり、それ以前からそうした形で演じられていたことは確かであり、近世初頭の《弱法師》はこれら新旧の演出がまだまだ整理されずに、併存していたと見られるのである。

三 【中の舞】と【イロエ】——《弱法師》の舞事

世阿弥本《ヨロホシ》には、「イリヒノカケモマフトカヤ」の謡の後、「マウフセイナルヘシ」と、舞事の注記がある。その舞事がどのようなものであったかは明らかでないが、「舞アルヘシ」（世阿弥自筆本《江口》《柏崎》など）ではなく、「マウフセイナルヘシ」とあるのは、『弱法師』の舞が通常の舞事とは一応区別されていたことを示している。現行の演出では、〈舞入〉（喜多）・〈双調の舞〉（宝生）・〈盲目の舞〉（観世・金剛）の小書がついた時に限って【中の舞】ほかの舞が舞われるが、常の型ではここで【イロエ】を舞うのが普通であり、世阿弥本《ヨロホシ》の「マウフセイ」とは、現行演出で舞われる【イロエ】を指しているとも考えられるのだが、必ずしもそうではないらしい。

『観世流仕舞付』は、『弱法師』の舞事について、「破ノ舞有。一日のかけもまふとかや」と云て也。舞、杖にてまふ。又、一段杖にて後ハ扇にてまふ事も有」と記している。妙庵玄又手沢本の注記には「ハノ舞アリ。シツカナリ。序ニモ仕候」、江戸初期下掛節付十三冊本には「舞」とあり、これら近世初頭の資料によれば、『弱法師』のシテが舞うのは、本来、【イロエ】ではなく、「破の舞」であ

つたと考えられるのである。そして、この「破の舞」は現在の【中の舞】とほぼ同様の舞だったと思われ、妙庵本に「序ニモ仕候」とあるのを除けば、近世初頭の《弱法師》は【中の舞】に類する舞事を舞うのが常の型だったと見て大過ないであろう。

では、【中の舞】に代えて【イロエ】を舞うようになったのはいつ頃からなのであろうか。管見では、『喜多流宝曆仕舞付』（国立能楽堂蔵）の《弱法師》の型付に「『入日のかけも』ト右ノ方へ少出、足トメ、正面向、イロエ也」とあるのが、【イロエ】を舞う資料としては早い。この《弱法師》の型付には、宝永六年（一七〇九）二月、山田氏久隆なる人物による「松平伊予守殿御内渡部左太被相勤候ヲ見覚記置」との注があり、宝永六年以前には【イロエ】を舞う演出が行なわれていたものと見られる。

もっとも、江戸中期以後、【中の舞】を舞う演出が絶えてしまったわけではなく、『喜多流宝曆仕舞付』には、【イロエ】の演出とともに、「破懸り三段ノ舞」（【中の舞】）を舞う演出も併記されている。それによると、「入日の影も」の後、右へ回りながら扇を抜いて右手に持ち、左手に杖を持ってさし直し、「破懸り三段ノ舞」を舞うが、この時には、舞上げの「あら面白やわれ盲目とならざりし前は」から「永夜の清宵何のなすところぞや」までの謡を省略し、

そのまま「住吉の松の隙より眺むれば」に入るといふから、これはあくまで替の型であり、常の演出は【イロエ】だったと考えてよいだろう。江戸後期の『喜多流仕舞付』（大阪女子大学蔵）にも「『入日のかけも』ト出、イロエ」とあり、喜多流では江戸中後期を通じて【イロエ】を舞うのが常の形であった。

宝生流の型付は未見だが、寛政九年（一七九七）三月二十九日に宝生大夫が江戸城で演じた《弱法師》には（舞入）の小書が付いており（鴻山文庫蔵「触流御能組」）、常の型は喜多と同じく【イロエ】だったと認められる。金剛流も同様で、金剛流の習事を記した『金剛流秘密口伝書』（東岳院様能楽余香所収）に、「破懸り三段舞」の記述が見え、その最後に「つねハ三段いろゑ様ニする事也」とあるから、常は【イロエ】で、替の型として【中の舞】を舞う演出が伝わっていたことになる。この【中の舞】は、「始終杖ニテ舞也。盲目ノ舞故心得段々有」り、口伝であった由、同書の頭注に見えている。一方、観世流は舞事の入る位置が他流と異なり、これについては後述するが、『雪月花』（彦根城博物館琴堂文庫蔵）や片山幽室の寛政三年「観世舞曲秘書」（法政大学能楽研究所蔵）など、江戸後期の同流の型付によると、そこで舞われるのはやはり【イロエ】であった。

右に見てきたように、江戸中期以降の《弱法師》の型付は、観世・宝生・金剛・喜多いずれも「イロエ」を舞う演出を常の型として記しており、それはおそらく貞享頃の《弱法師》の復活と無関係ではないだろう。すなわち、貞享頃の復活を期に、《弱法師》の舞事が【中の舞】から「イロエ」へと変化したのではないかと想像されるのだが、一方、【中の舞】を舞う演出は、盲目者による杖の舞というその特殊性から、次第に習事化の道を辿っていき、《盲人》や《盲目の舞》などの小書へと継承されていったものと推察されるのである。

これに対し、金春流はやや事情を異にしている。大蔵庄左衛門・桜井彼面からの伝を書き留めた江戸後期の『古今見聞集』（宮城県図書館伊達文庫蔵）に、「天靈法師手数附」として収められる《弱法師》の型付は、金春流の同曲の型付として、管見のかぎりでは唯一のものであるが、そこには、「入日の影も」ト右エ廻り舞ニカ、ル。但シ杖ニて舞也。扇同前也」とあり、杖による舞が常の型として伝えられているのである。これは「観世流仕舞付」などと一致する型であり、古い演出を伝えるものとしてよいであろう。なお、『古今見聞集』には、「住吉の」トくつろき序ニカ、ル。三段之舞」という替の型も記されているが、この箇所まで舞に入る形は他の演出資料には全く見えない。金春

流独自の演出であろうか。なお、現行金春流では、他流と同じく、「入日の影も」で「イロエ」を舞う形となっているが、これが他流に影響されたものであることは言うまでもない。

これら諸流の形と大きく異なるのが、観世流の形である。観世流では、「イロエ」の入る位置が他流と異なり、「永夜の清宵何のなすところぞや」の後に「イロエ」が舞われる。例えば、観世元章系の型付である片山幽室の「観世舞曲秘書」（能楽研究所等蔵）に、この文句に続いて「イロエ、廻ル内ニ扇ヒロケ、シテ柱先ニテ、ワカ」とあるほか、彦根城博物館琴堂文庫蔵「雪月花」に転載されている「橘氏好附」（梅若氏好の型付）の《弱法師》にも、「永夜の清宵」の謡に続いて、「イロエ、角取左へマハリ、シテ柱先ニテ正面向、扇ヲ面へカザシ」と見える。「能楽蘊奥集」所載の観世清宣型付ほか、元章以降の観世流の型付はおしなべてこの形であり、それが現行の観世流にそのまま踏襲されている。しかしながら、江戸後期の型付「ひえをろし」（彦根城博物館琴堂文庫蔵）のみ、これらとは異なる演出を記している。それは、「入日の影も舞うとかや」で「立廻り」すなわち「イロエ」となり、「永夜の清宵」で「ハガ、リ中ノ舞」を舞う形であり、「イロエ」と【中の舞】を両方舞う演出は他の資料に全く所見のない特異な形と言えよ

う。「ひえをろし」には、「中ノ舞無ニスル形」すなわち現行観世と同じ型も記されているが、これは替の型として掲げられているに過ぎず、「イロエ」と「中の舞」を両方舞うのが「ひえをろし」の伝える観世流の常の型であった。あるいは、これが元章以前の観世流の形である可能性も考えられるが、これについては「ひえをろし」の型付の性格をさらに吟味した上で、なお後考に待つことにしたい。

おわりに

『観世流仕舞付』をもとに、『弱法師』の演出の変遷史をたどってきた。江戸初期の《弱法師》が世阿弥本から現行演出への過渡的な状況にあり、まだ演出が十分に整理されていなかったこと、そして江戸中期の綱吉周辺での復曲に際し、舞事が【中の舞】から【イロエ】になるなど、演出に改変が加えられたことを指摘したが、江戸初期の《弱法師》の演出が過渡期を示しているのは、間狂言も同様である。

《弱法師》の間狂言については、田口和夫氏「弱法師のアイ」（『鏡仙』研究十二月往来79。後『能・狂言研究』に所収）

に詳しく、寛永十六年の大蔵虎清「問・風流伝書」（鴻山文庫蔵）、江戸初期筆「問之本」（筑波大学図書館蔵）を挙げ

て、クセの後、ワキの通俊が目前の乞食を我が子俊徳丸とみとめて、「夜に入りてそれがしと名のり、高安へ連れて帰らばやと存じ候」と独白する部分が、江戸初期にはワキとアイとの問答であったことを明らかにされている。すなわち、「問之本」に「ワキいかにたれか有。御前に候。是成乞食の行衛をわすれ候な。畏て候。かやうにも有」とあるのがそれで、「最後のワキとアイの問答は現行では見られない。これは古い演出としてよいだろう」とされ、「もつとも「かやうにも有」という注記からは、すでにこの演出が用いられなくなりつつあったことが推察されるのである」と述べられる。妙庵玄又手沢本が、ワキ高安通俊の独白を欠き、「シカ〜」とアイとの問答を示す注記を記しているのは、これと関係があると思われるが、樹下文隆氏「弱法師」の変遷」（『鏡仙』研究十二月往来94）によれば、龍谷大学蔵下掛り本・京都大学蔵十番綴本も同じく、この独白を欠いているという。一方、室町末期写無章句本にすでにこの部分のワキの独白が見えているから、ワキの独白を持つ現行に近い本文も室町末期頃には成立していたことになり、近世初頭にはこれら二通りの演出がならび行なわれていたのである。

なお、森川杜園旧蔵「問ノ本」（国立国会図書館蔵）には、「宝生・喜多、問有。観世八問ナシ。金剛八両様ナリ」と、

観世流にアイの登場しない演出があつたことを伝える。も
つとも、『観世舞曲秘書』『ひえをろし』など、江戸後期の
観世流の型付によれば、いずれもアイは登場しており、
「観世ハ間ナシ」という右の記事の出所と、そうした演出
の有無はいまだ確かめられずにいる。